

ウクライナがドンバスを放棄する日

エコノミスト 西谷 公明

◆ある金融マンの死

ロシアによるウクライナ侵攻が始まって間もない2022年3月6日の朝、キーウ地区裁判所前の路上で、ひとりの金融マンがウクライナ保安庁(SBU)員によって処刑された。理由は国家反逆罪だった。

デニス・キレーエフ(ウクライナ金融協会理事、享年45歳)。彼こそが、ロシア空挺部隊によるキーウ急襲の極秘情報を事前に入手し、作戦が始まるまさに数時間前にウクライナ当局に通報したのだった。

侵攻から10日ほどが過ぎて、ベラルーシで停戦協議が行われた。テーブルを挟んでロシア側と向き合うウクライナ代表団の左端に、スーツ姿の彼がいた。保安庁員の目に、二重スパイと映ったらしい。

戦争は、人々を狭隘な愛国主義へ向かわせる。ウクライナ軍には「右派セクター」や「スヴァボダ(自由)」など、急進民族主義の流れを汲むグループが幾つも加わっている。

東部戦線には、2014年2月のマイダン政変後、ロシア系分離主義者と戦うため、これまで長くドンバスへ通ってきた「職業戦士」が多く配置されているはずだ。彼らには、マイダン政変を主導した「愛国戦士」としての自負がある。戦士たちに共感する国民も多い。ドンバスを気前よくロシアへ割譲などすれば、政権に反旗をひるがえす恐れもなしとしない。ゼレンスキー大統領が、領土で妥協できない大きな理由の一つも、そこにある

◆西側同盟の綻び

とはいえ、「銃」も「パン」も西側頼みの戦いを、いつまでも続けられるわけではない。

ロシアとの戦争は5年目を迎えようとしている。米戦略国際問題研究所(CSIS)の調査によれば、ウクライナ側の死傷者は開戦後、最大で死者14万人を含む60万人(ロシアのそれは120万人)にも上るといふ。

それに、この間に西側同盟そのものが根底から覆った。大西洋を越えた米・欧の堅い絆は、修復不可能なまでに綻んでいる。欧州主要国からは、陸続きの隣国ロシアとの現実的な妥協を提唱する声も上がる。揺れる欧州の波間で、この国の和平は霞んだままだ。

◆ドンバス放棄か、戦争継続か

トランプ米大統領は、戦後の安全保障と復興援助と引き換えに、ウクライナに対してドンバスの放棄を迫る。ゼレンスキー大統領はそれを拒否しつつ、米国によるロシアへの一層の圧力強化と兵器の供与、安全保障への直接的な関与を引き出そうとする。交渉の成否は、ウクライナの民族主義グループの動向にもかかるだろう。

ところで、冒頭の処刑から1年後、ウクライナ国防省情報総局(GBR)のブダノフ局長(当時、現大統領府長官)は、米紙ウォール・ストリート・ジャーナルのインタビュー(23年2月10日)で、次のように答えている。

「彼がいなければ、キーウは多分、占領されていただろう」

ロシアのスパイか、ウクライナの英雄か？ 同じ23年2月、ゼレンスキー大統領は彼の名誉を回復させた。狭隘な民族主義者の危うさが、そこにある。

(にしたに・ともあき)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003